

総務産業常任委員会行政視察報告書

総務産業常任委員会の行政視察を実施した結果について、下記のとおり報告いたします。

記

1 期　　日　　令和7年10月28日(火)～30日(木)

2 視 察 地　　岐阜県高山市、岐阜県下呂市、岐阜県土岐市

3 目　　的　　(1) 岐阜県高山市
「観光振興について」
(2) 岐阜県下呂市
「下呂市地域公共交通計画について」
(3) 岐阜県土岐市
「土岐市地域資源活用推進計画について」

4 参 加 者　　月　光　裕　晶　　佐　藤　政　人　　太　田　陽　子
伊　藤　正　彦　　太　田　芳　彦　　阿　部　　清
荒　木　春　吉
芳　賀　和　彦　(さくらんぼ観光課)
熊　谷　拓　哉　(議会事務局)

5 観察概要　　別紙のとおり

令和7年12月2日

総務産業常任委員会
委員長 月　光　裕　晶

寒河江市議会議長 柏　倉　信　一　殿

岐阜県高山市の視察概要

1 市の概要

高山市は、岐阜県の北部、飛騨地方の中央に位置し、周囲を飛騨市、下呂市、郡上市、大野郡白川村、長野県、福井県、石川県に囲まれている。東西に約81km、南北に約55kmあり、面積は2,177.61km²の日本一広い市であり、面積の約92.1%は森林で占められ、山や川、渓谷、峠などで地理的に分断され、標高も2,000mを超えるなど、地形的に大きな変化に富んでいる。令和7年10月1日現在の推計人口は81,924人、世帯数は36,829世帯。

2 財政の状況

(1) 令和7年度一般会計当初予算	60,500,000千円
(2) 自主財源	28,577,720千円 (47.3%)
(3) 依存財源	31,922,280千円 (52.7%)

3 観光振興について

(1) 観光客の動向

平成23年、海外戦略専門部署を設置し、トップセールスやプロモーションを展開。また国としてインバウンドの呼び込みを強化したことと相まって外国人観光客が増加している状態。外国人宿泊者の内訳として、台湾をはじめとするアジアの観光客が多いが、近年スペイン、イタリア、オーストラリア、アメリカといった欧米国の観光客が増加している。令和7年1月現在の外国人宿泊者の状況として、延べ宿泊者数全国19位。外国人宿泊数割合としては64%。一方で国内観光客が減少しているため、日本人観光客を持続的に受け入れていくためにはどうしたらよいかというのが喫緊の課題。

閑散期と繁忙期における観光客数の差が平成31年には2.5倍あったが、令和6年は1.5倍。差が縮小することで人材確保・雇用面、資材準備等の面で安定して観光客の受け入れが可能となっている。

高山市内宿泊施設は令和7年1月現在で約500施設。部屋数として5,000室に近い宿泊施設がある。内訳としては簡易宿所（ゲストハウス）が急速に増加している。市内空き家が一棟貸しの宿へ変わっており、空き家対策という面では非常に効果的である一方、近隣の住人の不安解決が求められている。

(2) 国内誘客の取組について

- ・パンフレットの作成
- ・全国各地での出向宣伝
- ・市内での各種イベントの開催
- ・地域資源を活かしたプロモーション

(3) インバウンド誘客の取組について

- ・多言語にこだわった情報発信
- ・インバウンド受入体制の整備
- ・ワンストップ医療相談窓口の開設

(4) 「観光を活用した持続可能な地域づくり方針」の策定について

市として持続可能な地域づくりを進めるために観光を活用するという方針を明確化し、市民や事業者に対して改めて訴えていく取組を位置づけた。エージェントを含む観光事業者との持続的・継続的な関係の構築が必要。

- ・観光を活用した持続可能な地域づくりを進める体制強化
- ・観光を活用した持続可能な地域づくりを支える基盤強化

(5) 宿泊税の導入について

令和7年10月1日より導入開始。高山市宿泊税条例第2条に使途を明記。

(6) 民間の動向について

高山市が策定した「観光を活用した持続可能な地域づくり方針」に位置付ける役割分担に基づき、DMOである「一般社団法人 飛騨・高山観光コンベンション協会」が観光ビジョンを策定。～かけがえのないこの日常が、わたしたちの宝物～をキャッチフレーズに、単に観光関連施策の整理ではなく、観光を起点とした地域づくり、まちづくり戦略として策定された。令和7年、一般社団法人 飞騨・高山観光コンベンション協会が先駆的DMOに選定された。

(7) 現在の高山市における課題について

令和5年のアンケート結果にて、渋滞の発生やマナー違反、物価上昇、環境破壊等厳しい意見が上がっている。生活と密着した観光地である観光地であることから、観光客に対して市民が守ってきたものに敬意をもって滞在してくださいといった意味と、市民に対して遠路はるばるお越しいただいた観光客へ敬意を持ってほしいといった意味の両面からの「with Respect」という標語を掲げ発信している。

4 所感

寒河江市においても、観光振興を図る際には「市民への配慮」と「地域全体の利益の共有」を意識する必要がある。高山市のように、外国人観光客の受け入れ体制（多言語対応・緊急時支援）を整えるとともに、市民の声を反映しながら、地域資源を活かした“ありのままの寒河江”を発信していくことが求められる。また、広域観光ルートの形成や民間事業者との連携強化を進めることで、より持続的な観光振興が期待できる。

岐阜県下呂市の視察概要

1 市の概要

下呂市は、北の古い町並みで知られる「飛騨高山」の高山市、「世界遺産の白川郷」の白川村、南に「長良川の鵜飼」で有名な県庁所在地の岐阜市があり、岐阜県のほぼ中央に位置している。

市の中央を飛騨川が南へ、西には馬瀬川が流れ、御嶽山をはじめ河川の両側には山並みが迫り、飛騨木曽川国定公園や県立自然公園などが位置する自然豊かな地域。飛騨川に沿って国道41号やJR高山本線が南北に通り、横断する形で国道256号、257号が通じている。

江戸時代の儒学者林羅山が、有馬・草津と並ぶ天下の三名泉と表した「下呂温泉」をはじめ、市内には通年営業の温泉としては日本一標高の高い「濁河温泉」など、豊富な温泉と豊かな自然に恵まれている。

下呂市では、地域の人々が大切にする習慣や食文化を守りながら、農林業と観光が結びついた国際観光都市の創造、そして市の将来像である「ふるさとを感じる森と清流、人とまちが響きあう健康と交流のまち・下呂市」の実現を目指している。令和7年10月1日現在の推計人口は28,391人、世帯数は12,057世帯。

2 財政の状況

(1) 令和7年度一般会計当初予算	22,550,000千円
(2) 自主財源	8,493,215千円 (37.7%)
(3) 依存財源	14,056,785千円 (62.3%)

3 下呂市地域公共交通計画について

(1) 計画の位置づけについて

上位計画となる下呂市第三次総合計画に「ウェルビーイング（地域幸福度）」を市の中心となるものと掲げていることから、本計画においても「移動とウェルビーイング」、またSDGsの「貧困をなくそう」から「パートナーシップで目標を達成しよう」までそれぞれ交通が果たす役割の位置づけを行い、その中でどういった交通体系が組めるかということで検討してきた。

(2) 下呂市の現状について

交通空白地の解消として、昨年下呂市周辺はデマンドバスに置き換え、下呂市の周辺地ほど交通空白地がない。一方で昔からの中心市街地は、幹線交通に沿った地域であることから自由経路運航の導入ができず、人口が多い地域の周辺地域ほど交通空白地が残ってしまっている状況。

観光分野において、自然資源の観光地は交通機関のエリアから外れた場所に点在しているため交通がないことが課題であったが、上記デマンドバスの運行により、観光客も予約によ

り利用できるようになっている。観光客の動向としては、コロナ禍を脱し100万人に回復。移動手段としては約6割が自家用車、24%がJRということで自動車型の観光地となっている。

バスを使うハードルの原因として時刻表が分かりにくいことがある。デマンドバスにおいては簡素化。目的別に整理し住民へ配布し、分かりやすさに努めている。またデマンドバスにおいてはデマンド交通システムの導入による運行の効率化や観光地と幹線バス路線を組み合わせた観光地への行き方を観光協会がSNSで発信・周知している。

(3) 計画の基本方針と目標について

- ① どこでもアクセスできる交通ネットワークをつくる
→目標 交通空白地を解消する
- ② 誰でも多様な移動手段により社会参加できるしくみをつくる
→目標 誰もが使いやすい公共交通により社会参加を促進する
- ③ 柔軟に構成する移動のしくみをつくる
→目標 地域の実情にあわせた交通手段を切れ目なく確保する
- ④ 観光と地域間交流を広げる移動のしくみをつくる
→目標 地域振興と公共交通の利用促進につながる観光活用を進める
- ⑤ 市民協働で持続可能な交通のしくみをつくる
→目標 地域と連携した取り組みを拡大する

(4) 「観光と地域間交流を広げる移動のしくみをつくる」について

○公共交通の観光利用の促進

- ・都市間及び地域間を結ぶ幹線交通の確保
- ・地域内における支線交通の観光客利用の促進
- ・公共ライドシェア（自家用有償旅客運送）の導入
- ・わかりやすい時刻表とバスルート検索の改善

○未来技術を実装した将来の交通のかたち

- ・リニア中央新幹線・濃飛横断自動車道などの広域交通網ハブ機能
- ・JR下呂駅の改修
- ・自動運転による下呂温泉街新交通の実証実験
- ・MaaS等の導入による効率的な運行

4 所感

寒河江市でも高齢化や免許返納者の増加により、地域公共交通の確保は喫緊の課題である。下呂市のように、地域の実情に応じたデマンド交通の活用や、住民ニーズを丁寧に拾い上げる仕組みづくりが求められる。特に、寒河江の地形や人口分布に合わせて、既存バス路線とデマンド型交通の組み合わせを検討し、ICTを活用した効率的な運行体制を整備することが有効と考えられる。

岐阜県土岐市の視察概要

1 市の概要

土岐市は、岐阜県の東南部に位置し、東は瑞浪市、西は多治見市及び可児市、南は愛知県瀬戸市、豊田市、北は御嵩町に接している。市内に中央自動車道と東海環状自動車道の3つのICを備え、高速交通網の結節点としてアクセスが充実している。市域は、東西12.49km、南北16.68km、面積は116.16km²で、その約7割を丘陵地が占めている。

市街地は、北部を横断する土岐川流域及び支流の肥田川、妻木川流域の平坦部に開け、中央丘陵を環状に取り巻くように形成されている。平均気温15°C前後、平均湿度70%と温和な気候であり、年間降水量は1,500mm程度、夏季の降水量が多く、降雪は少なくなっている。

土岐市がある東濃地域は、良質な陶磁器用粘土が豊富なことから、1400年の歴史をもつ古来からの焼き物の産地として発展してきた。令和7年9月30日現在の推計人口は53,622人、世帯数は24,791世帯。

2 財政の状況

(1) 令和7年度一般会計当初予算	26,956,000千円
(2) 自主財源	12,980,027千円 (48.2%)
(3) 依存財源	13,975,973千円 (51.8%)

3 土岐市地域資源活用推進計画について

(1) 計画策定時の背景・課題

- ① 市域の7割が丘陵地。自然豊かな環境と温和な気候
- ② 人口減少と超高齢社会の到来
- ③ 窯業は土佐市の特徴。1400年の伝統は続き、やきものの生産日本一
- ④ 交通アクセスの良さ (3つのICやJR)、年間に何百万人も訪れる大型商業施設が点在
- ⑤ ふるさと納税による自治体応援

(2) 計画策定理由

美濃焼をはじめ、自然・歴史・文化などの地域資源が多く存在し、交流・関係人口の創出につながるポテンシャルがある。それらの魅力を磨き上げ、伝えていくことが、郷土愛やシビックプライドの醸成につながり、移住・定住へとつなげたい。土岐市の特性を踏まえ、その課題に向かい、持続可能な自治体運営のためには、地域資源の活用と実践が必要とし、目指す“まちの姿”的方向性を示す「羅針盤」として策定。

(3) 計画の位置づけ

土岐市総合計画を最上位とし、「土岐市まち・ひと・しごと創生総合戦略」等各計画の方向性と関連付け、地域資源の活用に向けて具体的な施策を検討・実施していくための計画として位置づけ。また、観光振興計画で達成できなかった取組を地域資源活用推進計画にも取

り込んで、観光振興計画の後継版という立ち位置で策定。

(4) 策定手法

- ① 数珠つなぎヒアリング
- ② 市民ワークショップ

○ヒアリング・ワークショップから見えたこと

- ・土岐市の魅力を、次世代や土岐市に関わる人々に伝えていくことや、市民の郷土愛を育み、シビックプライドを醸成していくことが重要
- ・市外の人にも土岐市の魅力を感じてもらい、土岐市に関わる人を増やして地域活性化につなげていくことが必要
- ・市民や土岐市に関わる人々が魅力に感じている地域資源を活かしながら、土岐市に関わる人々が積極的に参加するプロジェクトを進めることが重要

(5) 目指すべき土岐市の姿

将来のまちのイメージ “にぎわいや活力のある地域”

- ・郷土愛を育む・シビックプライドの醸成
- ・交流・観光人口の創出
- ・地域の魅力伝承

(6) プロジェクトテーマと取り組み

- ①訪れる（交流・関係人口の創出）
- ②育む（郷土愛・シビックプライド）
- ③伝える（地域の魅力伝承）

(7) 今後の展望

「伝える」：土岐市に残る文化、技術の継承、途絶えた事業復活

「育む」：市民生活に根づく魅力の創出と再発見、土岐市への愛着

「訪れる」：観光客の増加、土岐市民の一体感の創出

4 所感

寒河江市においても、地域資源の活用を図る上で、まず市民一人ひとりが自分たちのまちの魅力を再発見する機会を設けることが重要である。ワークショップや対話型アンケートを通じて住民の意見を集め、その中から地域の新たな価値を見出すことで、市民主体のまちづくりが進む。行政はその後押し役として、柔軟な支援制度やチャレンジの場を整えることが望ましい。